

216

339

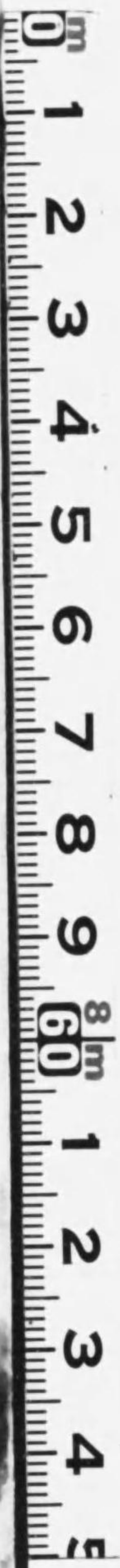
特 240

859

自派を惑乱せる

伊沢一派の暴戾

拓南新聞社發行



始



特200
859

序

本書は政界の惑星陰謀政治家と謳はる、伊澤多喜男と其の一派が、如何に我帝國南方生命線の基點たる臺灣に害毒を流したか、如何に臺灣統治の根本を紊し、如何に國權を侵害せるかを指摘し、再建新臺灣の發展工作上の参考に資せんとするものである。

彼れ伊澤が、官僚系の親分として中央政界を惑亂し、所謂政界の人入れ稼業の總元締を以つて任じ、更らに官民を問はず、臺灣關係者の參詣を強要し、大御所を氣取り、閥をつくりて公機を私有物視せんさせる非國民的態度は既に定評あり、識者の深く擧蹙して止まざるものであるが、本書の指摘する所に依り、夫等の事



實如何を正しく想起することが可能であらう。

今や彼等一派が極力反対し、ありご凡ゆる策動を巡らして阻止せんとせるにも拘らず、武官總督は嚴乎として再現し、臺灣統治の癌症たる伊澤派は没落の衰運に遭遇して居るのであるが、蓋し斯くの如き極めて不明朗なる陰謀政治家の存在は絶対に許容すべからざるものにて、彼等一派が中央のみならず、臺灣の地に於いて徹底的に批判排撃されて居る事は、國家の正常なる發展的躍進の過程に於いて當然の現象であらう。

現下我國は國政一新の革進期に際會し、南方問題に於ては武官總督の再現に依り、舉國的協力一致の精神を以つて南進國策の遂行を圖らんとする時に當り、我々國民はかゝる國家の進運を阻害

せんとする一切の非協力的異端閥を、根本的に批判・排撃・是正するに吝であつてはならぬと思はれる。

昭和十一年秋

編者識

伊澤多喜男の臺灣總督に就任するや、督府官吏への訓示中『臺灣の統治は、十五萬の内地人を對照とする統治でない。四百五十萬の臺灣人を對照とする統治である』と、殊更内地人を指して斯く提唱せるに就ては、忽ち物議騒然たるものがあつた。而かも民政的民間人を除いて極度に内地人を壓迫し、臺灣人に阿諛せる結果、總督官邸には臺灣獨立的文化運動者流の蝟集するところとなつた。

臺灣に三共製薬の侵入を援助す可く、星製薬會社の紛碎を期して、不法にも阿片事件なるものをデツチ上げたのも就任直後である。而かも星社長の無罪となるに於て、猶粗製モヒ拂下權を三共製薬その他に分割を餘儀なくせしめたのである。爾來伊澤の辛辣

なる勢力は全島に蟠窟するに至り、伊澤の後繼者上山滿之進、石塚英藏、太田正弘、中川健藏の四代に亘りて發展擴張され、大小の文官が上京する場合、必ず伊澤參詣を念とするに至り、文官ならずとも彼れに阿諛する者漸く多くを加ふるに至つた。斯くて彼れは臺灣の大御所を氣取り、參詣する事無き者には、之を強ふるの態度に出た。此の間伊澤の下に總務長官たりし後藤文夫、同内務局長にして後總務長官として再び來任せし木下信、同秘書官にして後高雄州知事として再び來任せし平山泰の三名は、最も忠實なる彼れの宣傳者であり勢力の濫用者であつた。

木下信には、總督太田政弘の末期に於て、櫻田門の 陛下御遭難の不敬事件當夜、一味は總督官邸に集合し、政變ある可しこの

豫想の下に、身大官であり乍ら不謹慎にも鴨料理にて祝盃をあげたる所謂總督官邸祝盃事件なるものがある。當日眞崎臺灣軍司令官の轉任を基隆に見送りたる列車中彼等は、既に嬉々としてはいやし、廻はりて軍部側を鑿鑿せしめたが、同夜木下信の外、督府主腦部主客六名（太田はドテラを着用す）が鯨飲し、第二次會は木下信送別宴の櫻本に催さるゝに當り、一同席を轉じて列席し、更に亂痴奇を極めたのがその内容である。

本事件は、後の南弘總督時代に、警務局長友部泉藏の手によりて調査せられしものを、友部が退任に臨んで平塚總務長官に手交して後事を託せるにも拘はらず、平塚は何故か不可解至極にも伊澤一派の強請に應じ、再調査の結果、事實無根なりとの一札を木

下に送つた。此の一札を楯に、本春の議會に於て彼れ木下は自己辯明の資料としたのであるが、現に生證人もあり、事實は依然として事實であり、事件は依然として生きて居ると稱せられて居る。本事件にて料理用の鴨の出所等證據煙滅に努力せる者は鐵道部運輸課長小川嘉一である。木下は櫻田門不祥事件當夜より退臺まで屢々愛妓一雄を擁して北投溫泉その他に外泊せることは、長官々邸門衛日誌と對照して明かであると言された。木下と云はず、井上英、平山泰いづれも夫々若き愛妓を持つて居たことは衆知の事實である。平山の如きは、高雄州知事たりし時、高雄神社境内に於て深夜愛妓と逢曳きたりして世の非難を購つた程、世は伊澤の天下なりとして傍若無人であつた。

本春の議會にて、木下は當夜の自己の立場を辯明したが、時間關係に於て虚偽を申立て、愛妓一雄を擁して外泊したここには一言も及ばなかつたのは、蓋し滑稽千萬である。

斯くの如くにして、官紀紊亂し、臺灣人は愈々増長し、中川健藏の臺灣總督として來任するや、日猶淺きにも拘はらず、直に地方自治改正に着手し、文教局長安武直夫、臺中州知事竹下豊次（地元）に反日の巨頭林猷堂あり）の兩名を除く督府幹部及び民間の反對を押切つて斷行した。之が爲め強硬派殖産局長殖田俊吉、警務局長友部泉藏兩名を關東州に左遷したが、兩名は之を怒つて拒絶し退任したと云ふ事實がある。是れ伊澤一派の曠曠に基く中川のロボットの行爲であつたが、地方自治改正の結果、忽ち彰化市會

の原案否決その他あらゆる矛盾撞着を演出したにも拘はらず、その功績によつて勅選議員に奏請されたことは、何んたる奇妙であらう。

六

斯く島内民間人の意氣地なき結果、臺灣人の増長に切齒しながらも、敢然と反對し得ず、伊澤一派の横行を黙視しつゝ、今日に至つたが、昨年俄然馬公にてオランダのスパイ船ジユノー号事件の勃發するあり、軍部と督府の對立となり、反伊澤派の擡頭となり、國防及統治革新の爲めの武官總督説に拍車をかくるに至つたのである。

此の武官説に對しても、伊澤支持の爲め、極端に彈壓を加へ、以てその一派に忠誠の意を表したものは警務局その者であると言

はれてゐる。彼は自派の勢力擴張策として自派と目す可き操觚者を買收し、又夥しく雜誌發行の許可を與へた。中川總督辭任の直前、週刊紙たる高雄新報をして民政的日刊紙たらしむ可く、木下唯一の子分たる新高新報唐澤信夫、大朝支局長にして下村宏の子分たる蒲田丈夫兩名の乗取策に呼應し、内海高雄州知事の應援によつて、許可を與ふ可く努力したが、遂に長官代理小濱内務局長は、統治上の影響大なりと見て捺印せず、さしもの猛運動も效を奏しなかつた。石垣の凡愚計る可からず、花蓮港廳玉里蕃界に於ける一巡查の人肉を喰ひたる事件の解決には、多くの疑問を残して居り、更に壹千五百圓を收賄して共產黨員を釋放せる外、あらゆる惡辣なる腐敗事件を暴露せし本年七月の高雄警察事件等、官

七

紀の紊亂、石垣警察行政の反映なりとされ、四面楚歌とならざるを得なかつたのも、蓋し當然の成行である。

更に殖産局長中瀬拙夫に絡まる米の麻袋改正事件、合同バイン會社創立關係の事件にて、高等官二、判任官二の入監を見、高等官一、判任官一の退官を見たるは、いづれも本年に入りて夫々結審の結果である。此の中麻袋改正事件には、木下信と高等學校以來の學友たる神戸の小泉製麻會社々長小泉某は、渦中人物の一人であり、製麻會社救濟案としての無理なりと云はれた改正であつたが是れは高等政策的に即決にて手輕に解消した。一流製麻業者の聯合機關よりバラ蒔かれたと見らるゝ金は、少なくとも二十萬

圓に達するであらうとの見込みである。

斯くて以上は伊澤派の跋扈に依り如何に全島の空氣を悪化せしめたか、それが爲め一般人民は、國權支持のため如何に武官總督に依つての革新を熱望したか。實に伊澤の流したる害毒は、中央政界に止まらず、先輩が血と汗とに依つて開拓せる植民地臺灣を頽廢せしむる事甚しかりしを知る可きである。

以下は即ち伊澤派人事に關する展望の一端である。

その一例

伊澤一派の人事は、民間の特趣會社に賣込む事汲々たるものあり、現在に於ても、前臺中州知事、警務局長、大分縣知事、熊本縣知事を歴任し、最も民政色濃厚なる本山文平はその一人である。中川總督退任の大勢決するや、臺灣青果會社々長白勢黎吉を威嚇して退社せしめ、その後任に本山を入社せしめたものである。

合同バイン會社常任監査役西澤義徴は、高雄州知事時代同社創立に盡力し、退官と同時に功勞株を貰ひ受けて現位置に就いたので問題であつたが、中瀬殖産局長の斡旋である。

臺灣青果會社常任監査役猪股松之助は、前新竹州知事で、臺灣製塩會社への賣込みに失敗し、是れ又中瀬殖産局長の斡旋で入社したものである。

臺灣人經營の臺灣新民報營業部長吉富保之は、前基隆市尹であつたが、伊澤的存在なるが故に入社して今日に及んで居る。

殖産局經營の大阪臺灣物産紹介所長河野博通、同大連臺灣物産紹介所長岩満重の兩名も中瀬殖産局長の斡旋に依るものであり、いづれも伊澤系に屬する。

その二例

反日的文化運動の巨頭林猷堂一派に對する伊澤派の因縁は、伊澤多喜男の總督就任と同時に結ばれたものであり、當時の臺中州知事にして最近臺灣青果社長となつた本山文平（後警務局長たり、又臺灣を去り、大分、熊本知事に歴任、民政派の爲め盡力す）が林猷堂に土地を與へ、臺灣民報なる週間紙をして木下信の總務長官辭任直前置土産として日刊紙の許可を與へた。即ち現在の臺灣新民報はその後身であり、従つて許可に對し或る献納金があつたと傳へられて居る。假りに献納金を否定し得るとしても前基隆市尹吉富保之を營業部長に賣込みたるが如き、兩者の特別なる關係を裏書するものであると同時に、同紙は反日的態度を持って物議を醸す一方に於て、常に伊澤派に忠誠であつた事は、讀者の能く熟知する所であらう。武官總督反對の社説を掲

げて憚らなかつたのも亦伊澤的追従の現れである。伊澤派が如何に林献堂一派を擁護せしかと云ふ實例をあぐれば、林献堂が上海に於て排日演説を爲したる事件に對して、軍部側が本年六月總督府に調査及處分方を要求せるも應ぜず、爲に憲兵隊が當人の取調べを行ふや、林一派は大に狼狽し、あらゆる偽瞞運動に着手し、林の子分にして林の投資に基く大東信託社専務取締役陳炳が警務局長石垣倉吉を訪問して哀訴するや、石垣は『右傾派を彈壓してやるから暫く隱忍せよ』と慰撫するに及び、欣然として直に萩洲參謀長を訪問し、右の言を述べて軍部側の緩和を嘆願するや、參謀長から『愛國運動を阻止するとは何事か』と大喝されほうくの態にて逃出したと云ふ。

更に多年林献堂の子分として臺灣獨立運動に参加せる新民報記者蔡培火は、七月末現金貳萬圓携帶して上京し、民政黨その他有力者を歴訪して林の名譽恢復運動に狂奔したと言はれるが、果然民政黨某最高幹部より臺中州知事日下辰太に打電し、救済されたき旨を依頼したと云ふ事實がある。

その三例

前總務長官木下信は、最も伊澤閥の勢力擴張者として暴戻を極めたる者であるが、民政黨代議士として本年八月來臺し、中川總督に向つて南洋旅行費四千圓を要求した。之に對し機密費貯財家として知らるゝ中川は、機密費より支出せず、督府事務費より壹千五百圓を支出したのは問題である。更に餘の貳千五百圓は、臺灣電力、臺灣銀行、臺灣青果其他に割當て、醜出せしめたと言はれて居る。

木下の臺北滞在中の行爲左の如し。

- 十日 夜總督官邸の招宴後第二次會を梅屋敷に開かれ、列席者は殖産局長中瀬拙夫、警務局長石垣倉吉、鐵道部事務官小川嘉一の民政的一派。第三次會は梅本に開かれ、列席者は臺灣青果社長本山文平、同社常務川嶋清等第四次會は日本亭で臺灣新民報支配人吉富保之、福澤某(木下の姻戚)新高新報社長唐澤信夫等出席。

十一日 夜鐵道ホテルの官民招待會後、第二次會を日本亭に開き、列席者は正米市場理事貝山好美、臺灣日々主筆大澤貞吉、警務局衛生課長高橋秀人、同警務課長森田俊介、同保安課長坂口主税等約十四名。

十二日 夜竹の家に於ける信州人會後梅屋敷に於ける民間人の招待會あり。

十三日 基隆發南洋に向け出發。

その四例

伊澤派の有力なる子分木下信が、總督太田正弘に従つて總務長官として來任するや一黨の爲めあらゆる利權を與へんと計り、國際通運會社々長中野金次郎の依頼により臺灣の製糖會社の出資に成れる臺灣倉庫會社の基隆岸壁倉庫割當の既得權益を掠奪す可く努力したが、餘り露骨なる壓政に對する非難の聲高きに及んで中止した。

又同社の支店長安座上眞の運動に對し、基隆市に近接せる保安林の一部を解除し、約二十萬圓を獨占せしめんとしたが、是れは督府殖産局側の反對で成功しなかつた。

かくの如き陰謀は間斷なく行はれたのである。

その五例

小林新總督の來任と共に、多年跳梁跋扈せし伊澤派の狼狽は言語に絶するものがあったが、一派の巨魁と目される殖産局長中瀬拙夫、勅任事務官川村直岡は、共に拓務省監理局長の椅子を覗ひ、中瀬は合同バイン會社創立以來の腐れ縁たる民政黨大麻代議士を通じて運動し、同局長困難なれば郷里長崎縣知事若くは鹿兒島縣知事を希望した。更らに同人は總務長官、臺灣拓殖副社長、日本糖業聯合會常任理事の一石三鳥を試みて失敗し、最後の切札として糖聯に未練を有して居るが、若し糖聯が同人を收容せば、糖聯は四方八方から攻撃を受けるであらうと言はれてゐる。

川村は中瀬よりも拓務入りに可能性多しと見られ、陰に伊澤が働いて居ると云はれる。伊澤は没落を辿りつゝある自派の臺灣人事の上に憤激し、得意の脅迫を永田拓相入江同次官の胸に擬して居ると云ふのである。

更に新竹州知事増田秀吉は、御殿女中の仇名あり、臺灣軍部に依頼して延命策を講じた事實あり、此の點中瀬も同様であり、特に中瀬は臺灣以來の親交者海軍南方關係某有力者にすぎり、公費を以つて築地の待合川喜に於て屢々會合した事實があると言はれてゐる。

以上の列擧は、勿論判明せる事柄の一端を指摘せるものであるが、之に依つて觀るも、如何に伊澤一派が多年に亘り臺灣に害毒を流し、如何に醜惡の限りを盡し來れるかを窺知するに十分であらうと思はれる。

今や武官總督の復活を見たる臺灣は、我南進國策の基點として最も重要な地位にあり、官民は協力一致して奉公の至誠を竭すべき時であるが、我々は小林新總督治下に於いて、眞に至公至平

なる國家本位の人事行政が確立され、統治の刷新明朗化を實現し我南方生命線臺灣の有する重大任務の建設的發展工作の躍進が一日も速かならんことを熱望して止まぬものである。

339
105.5

昭和十一年十月八日 印刷
昭和十一年十月十二日 發行

定價十錢

拓南新聞社編

東京市赤坂區檜町一〇番地

發行兼 印刷人 小野義德

東京市京橋區新富町三ノ二番地

印刷所 濱野印刷所

東京市京橋區銀座西八ノ七番地

發行所 拓南新聞社

終

